

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”!

(“法華経観”を見つける旅に出よう!)

『妙法蓮華経 ^{によらいじんりきほん}如来神力品第二十一』 (本門・^{ほんもん るつうぶん}流通分)

『妙法蓮華経 ^{ぞくるいほん}嘱累品第二十二』 (本門・^{ほんもん るつうぶん}流通分)

○ 『^{また めつど のち も}又如来の滅度の後に、^{ないしいちげ いっく き いちねん ずいき}若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん

^{もの われまたあのくたらしんみやくさんぼだい き あた さず}者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『^{そ しゅうがく もの こ ぎょうりょう あた}其の習學せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○ 『^{も もんげ しゆい しゅうじゅう え かなら あのくたらしんみやくさんぼだい ちか}若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○ 『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』

<常不輕菩薩品の復習>

・教えの結晶と行法の簡素化— 自分の仏性を見詰めることを怠らなければ、たとえ煩惱はそのまま放置しておいても、煩惱そのものがひとりでは「善のエネルギー」へ変わってしまうのです。

・仏性のめざめの糸口— 自分の「本質の善」を指摘してくれて、それに「正しい尊敬」をはらってくれたならば、誰でも自分をなおす気になります。 ~ これが仏性のめざめの糸口になるのです。

『法華経を持たん者を、若し惡口・罵詈・誹謗することあらば、大いなる罪報を獲ん』 (三・八頁 二行)

『諸の菩薩の爲に~應ぜる六波羅蜜の法を説いて』 (三・八頁 終行)

・なぜ菩薩には六波羅蜜— 菩薩にとって一番大切なのは、いうまでもなく「愛他・利他の精神」であり、その精神から発した実践行動~「布施」であります。

・【但行礼拝^{たんぎょうらいはい}】— だからといって、読誦や説法が仏道修行にとって不要だと誤解してはいけません。これは、「人の仏性を礼拝することが仏道修行の根本であり、全てに先行するものだ」という意味です。

『避け走り遠く住して、猶お高聲に唱えて言わく』 (三・〇頁 終四行)

『専らに經典を讀誦せずして、但禮拜を行ず』 (三・〇頁 一行)

【仏性礼拝】行の常不軽菩薩の精進の流れ (P62・4行/P44・終3行)

- ① 仏性を確信 — あらゆる人間が仏性を持っていることを確信。
↓
これをすべての考え方と行動の基礎とした。
- ② 仏性を礼拝 — 仏性の確信を、行動の上に明らかにした。礼拝行に徹する。
↓
- ③ 仏性の自覚へ導く — 『仏性礼拝』の実践によって、全ての人を、己の仏性に
↓
目覚めさせようと努力した。
- ④ 一行に努力を集中 — 『仏性礼拝』というただ一つの行いに努力を集中。
↓
- ⑤ 忍辱と柔順 — どんな迫害にあっても耐え忍び、柔順な態度で粘り強く所信を貫く。
↓
- ⑥ 真理を自得 — 無私の行いと仏性礼拝を積み重ねた結果、真理を悟得(自得)。
↓
(六根が浄まり、寿命増益) — 『仏性礼拝』の実践で六根が浄まり、寿命が延びた。
↓
(法華経を説き広める) — 『広く人の爲に是の法華経を説かん』。

・仏性とはなにか

(P63・終4行/P45・終3行)

第一は、— 不生不滅の「真如」そのものであり、あらゆるものを生かす「久遠本仏」そのものを示します。

第二は、— 「至上の真理を悟った完全な人間になりうる可能性」。すなわち「仏に成り得る可能性」

・慈悲とは

(P68・3行/P48・終3行)

寛容の心をもって人に対すれば、その人の「可能性を伸ばしてあげたい」という気持ちが、ひとりでに生じてきます。そんな気持ちを「慈悲」というのです。

仏教で、対人関係における最大の美德としている「寛容」も「慈悲」も、つまりは「人の仏性を認める」ことによって湧いてくるものであることを知らなければなりません。

・三因仏性

(P69・終5行/P49・終6行)

「正因仏性・よゐんぶつしょう」— 全ての人が本来そなえている仏性。人間は本仏と一体。

「了因仏性・よゐんぶつしょう」— 教えを学び、法に照らし合わせることによって、本来そなえている仏性を知る智慧。

「縁因仏性・えんいんぶつしょう」— 「了因」を育て、「正因」を開発せしめる縁となるような「善行の功德」。つまり自行化他の行。常不軽菩薩の「礼拝行」など。

・順化と逆化 《「仏性」を自覚させる二つの道》

(P72・1行/P51・5行)

「順化・じゆんけ」— 力にはずみを与え、引き出してあげる教化法。

「逆化・ぎゃっけ」— 厳しい破折によって、外部からその厚い堅い壁を打ちたたか教化法。

『人の爲に説きしが故に、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得たり』 (三二頁 六行)

・ひとつの行でも根気よく

(P81・終行/P58・1行)

常不軽菩薩が、ついに人々の教化に成功したのも・・・

- ①「正しいと思うひとつのことを」⇒ **(正しいことを)**
 ②「まごころをこめて」⇒ **(真心こめて)**
 ③「どのような事態が起こっても、くじけずに根気よくやり通す」⇒ **(繰り返す)**
 という三つの要因がそろっていたからにはかならないのです。

・寂光土とは

(P95・7行/P67・5行)

「寂(じやく)」とは、「**不変不動の安らかさ**」という意味なのです。～ **常に変わりなく光明に満ち溢(あふ)れた世界**を寂光土というのです。～ **万物を生かし、暖め、力づける、輝かしい光明がさんさんとふりそそぎ、**～ お互いに美しく照らし合いながらはたらいているという「**生々澆澆(せいせいほうほう)**」たる世界。

・自行と化他の循環が成仏の因

(P103・3行/P73・6行)

自行と化他行の循環によってしだいに悟りを深め、ついに仏の境地に達したというきわめて現実的な経過を、我々に示しています。**常不軽菩薩は、我々にとって他には得られぬ貴重なお手本**なのです。

・歴劫修行

(P107・終5行/P76・終4行)

常不軽菩薩のように、ただ一生だけの修行ではなく、死んでは生まれ変わり、また死んでは生まれ変わりし、幾度もの人生を歴(へ)ながら、真の悟りを得るために修行を続けていくことを意味します。

(※自らのいのちが無限・久遠であるからこそこの修行)

・仏に値わず法を聞かず僧を見ず

(P109・1行/P78・1行)

『瞋恚の意を以て我を軽賤せしが故に、二百億劫常に**佛に値わず、法を聞かず、僧を見ず、千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く**』 (三二頁 七行)

内から湧いてくる煩惱を、教えや悟りによって浄めることもできず、また外からやって来る害悪に向かっては、ただ修羅の闘争を繰り返すばかりで、常に阿鼻地獄(あびじごく)のような人生苦を舐(な)め続けなければならなかったのです。これが、「罰」というものの原理です。

・三宝

(P114・1行/P81・5行)

「住持三宝・じゆぢさんぽう」— **現実に即した、現象上の三宝**。目に見える仏、仏像など(仏)、経典(法)、僧侶、法の実践者(僧)。

「別相三宝・べつそうさんぽう」— **歴史的に見た場合の仏法僧**。人間釈尊(仏)、釈尊の説法(法)、釈尊教団の僧(僧)のように、本来一体であった三宝が特別な相(すがた)で現れたもの。

「一体三宝・いつたいさんぽう」— **一番深い意味の三宝**。久遠実成の仏、真如(仏)、真如そのもの、根源の法(法)、真如を具現した和合の姿(僧)。本質的な「**仏法僧**」で、もはや「**仏法僧が一体となっている**」ために、「**一体三宝**」というのです。

・逆縁・順縁

(P135・終2行/P96・終6行)

逆縁というものも大切であることを、暗にお説きになっておられるのです。～

逆縁の人を決定的な敵とすることなく、その一段上に立って大きく包容し、いつかは自分の陣営に引き入れるという、度量と根気よさが、どんな場合でも必要でありましょう。それが仏教精神というものであり、常不軽菩薩がそのいいお手本であるわけです。

『是の法華經は大に諸の菩薩摩訶薩を饒益して、能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ～ 如來の滅後に於て、常に是の經を受持し誦誦し解説し書写すべし』 (三三頁 二行)

すべての人間の**仏性を礼拝し、顕現させる**という根本精神を叩き込んだうえで、その精神に基づいて

「五種法師」を行じなければならぬことを教えられたものです。

『開示して人を教えて涅槃に住せしめ』 (三二四頁 八行)



<如来神力品のあらすじ>

【地涌の菩薩が広宣流布を決意・誓願】——

【三二六頁一行】先の『常不輕菩薩品』で己の仏性を自覚し、相手の仏性を礼拝することの大切さ、そして、仏の滅後において法華経を説き広めて行くことの大切さを伺った無数の地涌(じゆ)の菩薩(地中から湧き出て来た無数の菩薩たち)たちは大感激し、世尊を一心に仰ぎ見て合掌して、次のように申しあげました。

【三二六頁二行】『世尊、我等佛の滅後～當(まき)に廣(ひろ)く此の經を説くべし』「世尊よ。世尊のご入滅後においても、私たちは世尊の分身仏(ぶんじんぶつ)である諸仏がおられるすべての世界において、必ずこの法華経を説き広めて行きます。それはなぜかと申しますと、この尊い教えを聞かせて頂いたからには、／『受持・誦誦し、解説(げせつ)・書寫(しょしゃ)して、之(これ)を供養せんと欲す』この法華経を受持・読・誦・解説・書写という『五種法師の行』を行い、法華経をお説き下さった世尊のご恩にお報い致したいと願わずにはおれないからでございます」

【地涌の菩薩の誓願を聞いた釈尊と諸仏が、奇瑞を現わす】——

【三二六頁五行】すると世尊は、文殊菩薩をはじめとする娑婆世界にもともといた全ての菩薩、そして出家・在家の男女の修行者や、すべての生きとし生けるものを前にして、／『大神力を現じたもう』大神力を顕(あら)わしました。

【(偈)三二九頁終四行】『諸佛教世者(しよぶつくせしゃ)大神通(だいじんづう)に住して』「世を救う仏は、衆生に喜びを与えるために、諸仏とともに無量の大神力をもって不可思議な現象を現わします」

【三二六頁終三行】『廣長舌(こうちようぜつ)を出(いだ)して上梵世(かみぼんぜ)に至らしめ』 ① 仏さまが大変長い大きな舌(広長舌・こうちようぜつ)を出して、それが天高く伸びて天空まで届きました。

—— 【出広長舌・すいこうちようぜつ/ 二門信一・にもんしんいつ】

【三二六頁終三行】『一切の毛孔(もうく)より無量無數色(むしゆしき)の光を放って』そして② 仏さまの全身から、えもいわれぬ美しい光が発散され、十方世界をあまねく照らしました。

—— 【毛孔放光・もうくほうこう/ 二門理一・にもんりいつ】

【三二六頁終二行】すると、世尊の周りに端座(たんざ)されていた十方世界から呼び寄せられた数多くの諸仏(十方分身仏)も、釈尊と同様に長く大きな舌を出し、体中から無量の光を放たれたのでした。そしてこのような状態が百千年も続きました。

【三二七頁一行】この百千年を終えると、世尊と諸仏はこの広長舌（こうちようぜつ）の相をおさめられて、
『然（しこう）して後（のち）に還（かえ）って舌相（ぜつそう）を攝（おさ）めて、一時に警欬（きょうがい）し、』
次に一斉に㊸咳払いをし、——【一時警欬・いちじきょうがい/ 二門教一・にもんきょういつ】

【三二七頁二行】『俱共（とも）に彈指（たんじ）したもう』そして㊹指をパチンと鳴らされました。
——【俱共彈指・ぐぐたんじ/ 二門人一・にもんにんいつ】

【三二七頁二行】『是（こ）の二つの音聲（おんじょう）、徧（あまね）く十方の諸佛の世界に至って、地皆（じみな）
六種に震動（しんどう）す』この「咳払い」と「鳴らす指の音」は㊺十方世界という宇宙全体に響
きわたり、そして大地が六種に揺れ動きました。

——【六種地動・ろくしゅじどう/ 二門行一・にもんぎょういつ】

【三二七頁五行】『衆（もろもろ）の寶樹下（ほうじゅげ）の師子座上（しじじょう）の諸佛を見（み）』すると、多
宝塔の中に端座する釈迦牟尼仏と多宝如来と十方分身の諸仏のお姿、そして無量無辺百千万億
という無数の菩薩や出家・在家の男女の修行者たちが釈迦牟尼仏を恭敬（くぎょう）している尊
い情景を、宇宙の全ての生き物、つまり天人や竜神、夜叉（やしや）や阿修羅（あしゅら）などの鬼
神、人間や人間以外の生物たちが、㊻宇宙のあらゆる所から目（ま）の当たりにすることができ、そ
して今までに経験したことのない大きな感動に包まれました。

——【普見大会・ふげんたいえ/ 未来機一・みらいきいつ】

【三二七頁終四行】『即時（そくじ）に諸天、虚空（こくう）の中に於て高聲（こうしやう）に唱（とな）えて言（い）わく』
その時、㊼虚空から天界の善神たちの声が高らかに響きわたってきました。その声は次のよう
な言葉でした。「この全宇宙には無量無辺百千万億恒河沙（ごうがしゃ）という無数の世界があり、
その中に娑婆（しゃば）という世界がある。そこに一人の仏さまがおられ、『釈迦牟尼仏』と申さ
れる。この釈迦牟尼仏は、／『今諸（もろもろ）の菩薩摩訶薩の爲に、大乘經の妙法蓮華・教菩薩法・
佛所護念と名（なづ）くるを説きたもう』これまで長い間、諸仏が護（まも）り続けてきた菩薩のた
めに説かれた教え、つまり、『妙法蓮華經』を諸々の菩薩たちに説き示すのである。／『汝等
（なんだち）當（まさ）に深心（じんしん）に隨喜すべし』一切衆生よ。みんな心の底から有難く思わなけ
ればならない。／『亦當（またまさ）に釋迦牟尼佛を禮拜（らいはい）し供養すべし』そして、釈迦牟尼仏
を心から礼拝し、供養しなければならぬ」というものでした。

——【空中唱声・くうちゅうしやうしやう/ 未来教一・みらいきょういつ】

【三二八頁二行】この天空から響きわたる諸天善神の声を聞いた一切の衆生は、／『是（かく）の如き
言（ことば）を作（な）さく、南無釋迦牟尼佛・南無釋迦牟尼佛と』㊽一斉に合掌して『南無釈迦牟尼
仏』、『南無釈迦牟尼仏』と唱えたのであります。

——【咸皆歸命・かんかいきみょう/ 未来人一・みらいにんいつ】

【三二八頁三行】（『種種（しゅじゅ）の華・香・瓔珞（ようらく）・旛蓋（ぼんがい）及び～皆共（みなとも）に遙かに娑婆（しゃば）世界に散ず』）すると、様々な美しい花や香や宝石が、天空から降り注がれて来ました。これらの花々や宝が十方世界から降って来るありさまは、まるで雲が集まって来てそれが美しい幕となって**◎世尊をはじめ諸仏を覆い尽くした**のでした。

——【**遥散諸物・ようさんしょもつ/ 未来行一・みらいぎょういつ**】

【三二八頁六行】すると十方世界の区別がなくなり、／（『通達無礙（つうだつむげ）にして一佛土（いちぶつど）の如し』）どこの世界にも自由に行けるようになり、**◎宇宙全体がひとつづきの世界・仏土**となりました。

——【**通一仏土・つういちぶつど/ 未来理一・みらいりいつ**】

【**奇瑞を現わした理由**】——

すると、**世尊**は、なぜこれらの不可思議な現象を諸仏とともに現わしたのか。その理由を説かれたのであります。

【(偈)三二九頁終行】（『佛の滅度の後（のち）に能（よ）く此の經を持（た）たんを以ての故に諸佛皆歡喜して無量の神力を現じたもう』）「私が入滅した後の**末法の世に、この法華經を護持する者がいる**ことを諸仏は明らかに見通しておられ、**諸仏も皆お喜びになっている**ために、諸仏とともに大神力をもってこれらの不可思議な現象を顕（あら）わしたのです」

【三二八頁七行】さらに**世尊**は、**上行菩薩をはじめとする地涌の菩薩たちに告げられました**。

（『諸佛の神力は是（かく）の如く無量無邊（むりょうむへん）不可思議なり』）「諸仏の神力というものは、そなたたちが今、目にしたように考えも及ばない無量無辺不可思議なものです」

^{じょうしゅしょうどう}【**上首唱導の師である四大菩薩と地涌の菩薩に『広宣流布』を託す**】——

【**結要付属・けつちようふぞく**】——

【三二八頁終四行】/(偈)三三〇頁一行（『屬累（ぞくゐ）の爲の故に』）（『是（こ）の經を屬累せんが故に』）「ここでそなたたちに**法華經を説き弘めることを任せたい**と思います。／（『此（こ）の經の功德を説かんに、猶（な）お盡（つく）くすこと能（あた）わじ』）この法華經を受持し、**法華經を説き弘める人の功德**というものは、仏の神力を用いて無量無辺百千万億阿僧祇劫という無限の時間を費やしても、**説き尽くすことはできません**。（(偈)三三〇頁三行）『是（こ）の人の功德は無邊（むへん）にして窮（きわ）まりあることなけん』）そしてその人が得る功德というものは、無辺にして極まりがなく甚大であります。それは譬えていうと、（(偈)三三〇頁四行）『十方虚空の邊際（へんさい）を得べからざるが如し』）十方世界の虚空の果てを見きわめることができないように、**法華經の功德というものは、誠に偉大なものなのであります**」

【三二八頁終三行】（『要を以て之（これ）を言わば』）「これまでのことを**要点として言うならば**、／（『如來の一切の所有（しゅう）の法』）『如來が悟った一切の法』と／（『如來の一切の自在の神力』）『如來が具える一切の神力』と／（『如來の一切の秘要（ひよう）の藏（ぞう）』）『如來の心の中に満ち満ちている』

切の教え』と、／『如来の一切の甚深(じんじん)の事(じ)』そして『如来が衆生済度をされた一切の体験』の／『皆此の經に於て宣示顕説(せんじけんぜつ)す』すべてが法華經の中に悉く説き明かされているのです。／『是(こ)の故に汝等(なんたら)如来の滅後に於て、應當(まさ)に一心に受持・讀誦し、解説・書寫し、説の如く修行すべし』私は今こそ、この最も大切な法華經を皆さんに託し、そして仏の大神力を悉く本化の菩薩である地涌の菩薩に授与するのです」と釈尊は説かれたのであります。

—【結要付属(囑)けつちようふぞく/別付属(囑)べつふぞく)】

【三二八頁終行】『應當(まさ)に一心に受持・讀誦し、解説・書寫し、説の如く修行すべし』「ですから、私が滅度した後はこの教えを、一心に受持・読・誦・解説・書写する『五種法師の行』を務めていくことが、何よりも大切なこととなります」

【三二九頁一行】「もしどこかで、この『五種法師の行』が行われるのであるならば、たとえその場所が花園であろうが林のなかであろうが、または僧房や在家信者の家、殿堂であろうが、はたまた山の谷間や広野であろうが、その場所に塔を建てて供養しなければなりません」

【法を實踐する所は『即是道場』であり、その場が“聖地”となる】—

【道場觀・どうじょうかん／即是道場】—

【三二九頁五行】／【經典一頁一行】『當(まさ)に知るべし、是(こ)の處(ところ)は即(すなわ)ち是(こ)れ道場なり。諸佛此(こ)に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛此(こ)に於て法輪を轉(てん)じ、諸佛此(こ)に於て般涅槃(はつねはん)したもう』「なぜならば、皆さん。よくよく知らなければなりません。法華經を實踐する場所こそ、諸仏が悟りを開かれた場所であり、諸仏が法を説かれる場所であり、諸仏が入滅される場所であると言えるのであります。その場所自体がどのような場所であっても、仏が聖行をなされる『聖地』となるのであります」

—【道場觀・どうじょうかん】

【法華經を護持する者は、仏の姿・菩薩を目にする者】—

【(偈)三三〇頁四行】「この尊い法華經を護持する者は、ほかでもありません。／『能(よ)く是(こ)の經を持(たも)たん者は則(すなわ)ち爲(こ)れ已(すで)に我(み)を見(み)～分身者(ふんじんしゃ)を見(み)～諸(もろもろ)の菩薩を見るなり』その者は私の姿を見る者であり、私と共にいて『私と心が通い合っている者』であります。また、多宝仏や諸仏を見る者であります。そして多くの菩薩たちを見る者であります」

【(偈)三三〇頁八行】『得(たま)える所の秘要(ひよう)の法能(よ)く是(こ)の經を持(たも)たん者は久(く)しからずして亦(また)當(まさ)に得(い)べし』「この法華經を護持する者は、仏が長い歳月を費やして悟ることのできる秘要の法・法華經を、さほどの年月をかけずして得ることができるであります」

【(偈)三三〇頁終三行】「この法華經をしっかりと信受する者は、さまざまな教えの内容を理解したものと同然で、教えを人に向かって説く時は、／『樂説窮盡(ぎょうせつぐうじん)なきこと風の空中に於て一切障礙(いっさいしょうげ)なきが如くならん』あたかも風が何ものにも遮(さえぎ)られることもなく空中を果てしなく渡りゆくように、教えを自由自在に、無限に説くことができます」

【経典／法華経を説く者は、“太陽”のように世の闇を除く者】――

【(偈)三〇頁終二行] / 【経典二六頁終行】 『如来の滅後に於て 佛の所説の經の 因縁及び次第を知って 義に隨したがって實(じつ)の如く説かん』 そのような人たちは、私が滅度したのちの世において、私が説いた教えが『どのような因縁』で、『どのような順序次第』で説かれたのかということをよくわきまえています。ですから、法華経をその内容にしたがって、間違いなく、確実に真義を説くことができるのであります」

【(偈)三三頁一行] / 【経典二七頁一行】 『日月(にちがつ)の光明の能よく諸(もろもろ)の幽冥(ゆうみょう)を除くが如く』 「太陽や月の光が、すべての暗黒の闇を除くように、この人は広く世間に法華経を説き弘めることで、衆生を迷いの人生、闇路(やみじ)の人生から救い出し、悉(ことごと)くその苦しみの闇を取り除くことができます。 / 『無量の菩薩をして畢竟(ひっきょう)して一乘(いちじょう)に住せしめん』そして無数の菩薩を育てあげ、菩薩たちを必ず『一仏乘』の道に導き入れ、その道にとどまらせるであります」

【(偈)三三頁三行] / 【経典二七頁終三行】 「そのようなわけで智慧ある者は、この法華経を実践することの功德を知ったならば、 / 『我が滅度の後(のち)に於て 斯(こ)の經を受持すべし 是(こ)の人佛道に於て 決定(けつじょう)して疑(うたがい)あることなけん』 たとえ私の滅度においても、この教えを受持するのは当然のことになります。したがってその人の心には、仏の悟りを目ざそうという固い決意が生まれ、もはや教えに対して動揺や疑念を抱(いだ)くようなことはありません」

こうして釈尊は上行菩薩をはじめとする『本化の菩薩』たちに対して、後(のち)の世において法華経を実践することの大切さを説き、法華経を説き弘めていく一大事を託されたのでありました。



しやくもん ほんもん そう 迹門と本門の総まとめ

(P159・1行 / P115・1行)

『如来神力品』も法華経二十八品のなかで、非常に大切な品です。なぜ大切であるかと言えば、迹門の教えと、本門の教えの「総まとめ」がしてあるからです。しかも単なる総まとめだけではなく、「迹門の教えも、本門の教えも、別々なものではない。～ その神髓に達すれば、すべての点において『一つ』である」ということを、極めて強くとかれているからです。

○「迹門」とは：人間釈尊が悟られた教え。～ すなわち「この世界の物事の成り立ち、法則」「人間としての生き方」が解き明かされている。そしてこの正しい生き方のためには、なによりも『智慧』が必要。したがって「迹門」は『智慧』の教えと言われている。

○「本門」とは：すべての物事を生かしている「久遠実成の本仏」を解き明かす。最終的に救われるには、「久遠実成の本仏と自分が一体であることを悟る以外にありえない」ことが説かれている。本仏とは「大慈悲」そのもの。したがって「本門」は『慈悲』の教えと言われている。

— ●印の数字は、先の「あらすじ」(p4~)で表記されている数字 —

①出広長舌・せいこうちようぜつ	—	二門信一・にもんしんいつ
②毛孔放光・もくほこう	—	二門理一・にもんりいつ
③一時警欬・いちじきょうがい	—	二門教一・にもんきょういつ
④俱共弾指・ぐくたんじ	—	二門人一・にもんにんいつ
⑤六種地動・ろくしゅじどう	—	二門行一・にもんぎょういつ
⑥普見大会・ふげんたいえ	—	未来機一・みらいきいつ
⑦空中唱声・くうちゅうしょうしやう	—	未来教一・みらいきょういつ
⑧咸皆帰命・かんかいきみやう	—	未来人一・みらいにんいつ
⑨遥散諸物・ようさんしよもつ	—	未来行一・みらいぎょういつ
⑩通一仏土・つういちぶつど	—	未来理一・みらいりいつ

そういう神秘的な現象に、如来の大慈悲心を象徴してあり、またその不可思議な現象の一つひとつに、本門と迹門の一体である意味が含まれているのです。

すべては—

(P227・4行/P164・終2行)

理想であると同時に、仏さまによる保証でもあるのですが、これらのひとつひとつが、すべて「—(いつ)」という文字に貫かれていることを、あなたも心に深く印象されたことと思います。これは、ほかのどの宗教聖典にも見られぬ、素晴らしいことです。

《^{しゆい}思惟のひととき ①》

如来神力品での不思議な光景は、「仏さまが示す『理想』であると同時に、そうなるのだという『保証』」という意味で、すべて「—(いつ)」に貫かれていることを示している仏教の素晴らしい特徴であると説かれています。

—では、私たちの日常生活で、この「—(いつ)」になることの大切さについて、つまり「相手と一つになることの大切さ」「相手の立場になって考える」等について、どのように考えているか？ またそのことを私は意識して生活しているか？

ふりかえってみましょう。

『若し我是の神力を以て、無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て、屬累の爲の故に』

此の經の功德を説かんに、猶お盡くすこと能わじ』 (三二八頁 終五行)

仏の偉大な神力をもって、無限の時間をかけても、法華經を説き弘めるためにこの法華經の功德を説いても、決して説き尽くすことはできません。それほど法華經の功德、法華經を説き弘める功德というのは計り知れなく大きいのです。

『要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事・皆此の經に於て宣示顯説す』(三二八頁 終三行)

如来の一切の所有の法 (P231・終4行/P168・7行)

法華經のなかには、如来の悟った一切の正法が述べ尽くされているのです。
したがって、法華經はお釈迦さまご一代の説法の全てをまとめた「総決算の教え」です

如来の一切の自在の神力 (P232・終5行/P169・4行)

如来の衆生済度の自由自在な力(自在の神力)が、法華經の中にみなぎっているという意味です。
ですから法華經のどこを読んでも、一偈一句を読んでも救われるのです。

如来の一切の秘要の蔵 (P233・終5行/P169・終2行)

如来の胸に大事にたくわえられている一切の教えという意味です。
如来はあらゆる物事の実相を見通しであり、あらゆる衆生の機根を知り分けているのですから、それぞれの場合にに応じて適切な教えを説いてくださるのです。

如来の一切の甚深の事 (P234・終3行/P170・終5行)

如来がこれまで無限の時間をかけて体験されたこと、心をめぐらされたこと、これら一切の全てが法華經の中に説き示されているという意味です。

結要付属(囑)/別付属(囑) (P237・終6行/P172・終6行)

法華經に託して、計り知れない神力を全て本化の菩薩(地涌の菩薩)に授与するのだと、明らかに宣示顯説・せんげんぜつされているのです。～ 要中の要(よちゅうのよ)を結集して授け、委任するという意味です。

《愚惟のひととき ②》

【結要付属(けつようふぞく)】で、『法華經』は如来の「全ての教え」(如来の一切の所有の法)であり、如来の「救いの神力がみなぎっている教え」(如来の一切の自在の神力)であり、「如来が秘めている衆生済度の全ての教えの要」(如来の一切の秘要の蔵)と「衆生済度の一切の体験」(如来の一切の甚深の事)であると説かれています。

— ではこのように、この上なく尊い『法華經』に、私たちは今世、巡り会うことができた事実を、あなたはどのように思うか? かみしてみましょ。

どう じょう かん 道場観

(P243・終3行/P177・終6行)

まさ し こ ところ すなわ こ どうじょう しょぶつここ おい あのくたらしさんみやくさんぼだい え
『當に知るべし、是の處は即ち是れ道場なり。諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、

しょぶつここ おい ほうりん てん しょぶつここ おい はつねはん
諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て般涅槃したもう』(三二九頁 五行)

よく知るのですよ。法華經を實踐する場所は仏が悟りを開かれた場所そのものであり、その場所こそ法が説き弘められる所であり、そこで仏が入滅される場所、すなわち仏のお徳を長年にわたって偲ぶ場所にほかなりません。(それほど尊い場所なので、そこには塔を建てて、供養をしなければならないのです)

尊いのは教えそのものであり、教えの實踐であります。「正しい信仰」とは、教えを受持して修行し、それを日常生活のうえで実践するところにあるのです。

このことは我々の『信仰生活の基本』となる大切なことからですから、よくよく心に刻み込んでおきたいものです。

《尊いのひととき ③》

『當に知るべし、是の處は即ち是れ道場なり。諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て般涅槃したもう』の『道場観』の經文をあらためて読み返して…

— あなたはどのような感想を持たれますか？ この經文を味わってみましょう。

よ こ きょう たも もの すなわ こ すで われ み またたほうぶつ およ もろもろ ふんじんしゃ み また
『能く是の經を持つたん者は 則ち爲れ已に我を見亦多寶佛及び 諸の分身者を見又

わ こんにちきょうけ もろもろ ぼさつ み
我が今日教化せる 諸の菩薩を見るなり』(三三〇頁 四行)

この教えを受持する者は、それはほかでもありません、私と心が通い合っている者であり、また多宝如来や分身仏とも心が通じ合っている者です。そして今、私が教化している多くの菩薩たちと共にいるのであります。

よ こ きょう たも もの しょほう き みようじおよ ごんじ おい きょうせつぐうじん かせ
『能く是の經を持つたん者は 諸法の義名字及び言辭に於て 樂説窮盡なきこと風の

くうちゅう おい いっさいしやうげ ごと
空中に於て一切障礙なきが如くならん』 (三三〇頁 終三行)

この教えを受持する者は、すべての教えの主旨も意味も良く理解し、人に向かって説く時は、あたかも風が空中を流れる時に何もさえぎるものが無いのと同じように、自由自在に法を説くことができるのです。

『如來の滅後に於て 佛の所説の經の因縁及び次第を知って～日月の光明の能く

諸の幽冥を除くが如く～是の人佛道に於て決定して疑いあることなけん』

(三三〇頁 終二行)

私の滅後に於いても（この經を受持する者は）、私が説く教えがどのような因縁で、どういう説かれ方をするのかという順序次第を知り分け、私の説いた通りに真義を説くであります。それはあたかも日月の光が全ての暗黒を消し去るように、人々の迷いの闇を消滅させ、そして無数の菩薩を一仏乗の道に入らせるであります。そのような訳で、この教えの功德が大変すぐれていることを聞いたならば、私の滅後にこの教えをしっかりと受持するのは当然のことだと言えます。そして人々の心には仏の悟りを求める決意がしっかりと定まり、もはや動揺したり疑惑を生じたりすることがありません。

五綱教判

(P259・4行/P189・終5行)

日蓮聖人は以上の經文からヒントを得て、独自の見解をたてられ、次の五項目を立てられました。この五項目（五綱目）を「五綱教判・ごうきょうはん」と言います。

「教・きょう」— 教えのこと。お釈迦さまは、どの教えを最勝のものとされているかを明らかに見定めなければならないということです。法華經こそ真実の妙法なのです。

「機・き」— 機根のこと。法華經を實踐する者の理解力と実行力の程度をいいます。法華經が広まるためには、それに相應するだけの機根を持つ人が必要であります。

「時・じ」— そのような機根の人々が出てくる時期のこと。時期が到来し、氣運が熟さなければ、どんな立派な教えでも、日の目を見ることはありません。

「国・くに」— 正法が広まる地がどこであるか（仏さまがどこを選ぶか）ということ。日蓮聖人は、我が日本こそ法華經広宣流布の根拠地であると断じておられます。

「序・じょ」— 法が説かれる順序のこと。法が広まる順序次第を言います。

本化・迹化の内面的考察

(P269・終3行/P196・9行)

「本当の救い」というものは、「本仏を見ること」。すなわち「本仏に生かされているという自覚」を持ち、「久遠実成の本仏と一体であるという真実にめざめる」ことにあるのですから、本化と迹化の菩薩に大きな格差をつけてお示しになったものと思います。

～ 悟りさえすれば、だれでも「本化の菩薩」になりうるのです。

《愚惟のひととき ④》

「本当の救い」とは、「仏を見ること」、「本仏に生かされているという自覚」を持ち、「本仏と自分は一体であるという『真実』に目覚めること」だと説かれています。

— 庭野開祖が説くこの教えについて、かみ締めてみましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑤》

庭野開祖は、「仏を見ること」、「本仏に生かされているという自覚」を持ち、「本仏と自分は一体であるという『真実』に目覚めること」ができれば、だれでも「本化の菩薩」になりうると説いています。— このことについて、かみ締めてみましょう。



<囑累品のあらすじ>

【釈尊が、やおら立ち上がる】—

【三二頁一行】「大神力によってこの宇宙が一体となった不可思議な現象(『通一仏土・つういつ ぶつど』)などを現わした釈迦牟尼仏は、やおら説法の座から立ち上がられました。

そして、大神力を用いられて、その場に居並ぶ無数の菩薩の頭をあまねく右手で撫(な)で、そしてつぎのように仰(おお)せになりました。

【菩薩をはじめ聴聞の諸衆に、法華経『広宣流布』を託される】—

【総付属(囑)・そうふぞく】—

【三二頁二行】(『我無量百千萬億阿僧祇劫(あそうぎこう)に於て、是(こ)の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習(しゆしゆ)せり。今以(いまもつ)て汝等(なんだち)に付囑(ふぞく)す。汝等應當(なんだちまき)に一心に此の法を流布(るふ)して、廣く増益(ぞうやく)せしむべし』)「私は無量無辺百千万億阿僧祇劫(あそぎこう)という計り知れない永遠の時間をかけ、そして大きな苦勞を重ねて、得難き悟りを得ることができました。その尊い悟り・法を後世に伝えるという『一大事』を、今、そなたたちに託します。よいですか。どうか一心にこの法を説き弘めて、あまねく衆生の幸せが増すように導くのです」

【三二頁四行】さらに世尊は菩薩たちの頭を三度(みたひ)撫(な)でられ、そして同じお言葉を三度(みたひ)重ねて仰(おお)せになりました。

【三二頁四行】/【教師資格証】(『我無量百千萬億阿僧祇劫(あそうぎこう)に於て、是(こ)の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習(しゆしゆ)せり。今以(いまもつ)て汝等(なんだち)に付囑(ふぞく)す。汝等當(なんだちまき)に受持・讀誦し廣く此の法を宣(の)べて、一切衆生をして普(あまね)く聞知(もんち)することを得せしむべし』)「私は無量百千万億阿僧祇劫(あそぎこう)という果てしない時をかけて、この得難い仏の悟りを得ることができましたが、今、その教えの全てをあなた方に任せたいと思います。よいですか。あなた方はこの法をしっかりと信じ、受持し、讀誦して、この教えを説き弘め、一切衆生がこの法を理解するように努力をするのです」

—【総付属(囑)・そうふぞく】—

【得難い希有(けう)の法だからこそ、“法惜しみ”をしてはいけない】—

【三二頁終三行】「なぜ法を弘めることを託するのかと言うと、無限ともいうべき長い年月をかけてようやく得ることのできた悟りではあっても、/ (『如來は大慈悲あつて諸(もろもろ)の慳慳(けんけん)なく』) 如来は大いなる慈悲を持っているために、法惜(ほお)しみをするという心などなく、

諸法実相を見通す**真実の智慧**(『**仏の智慧**』)、あらゆる衆生を救う**慈悲の智慧**(『**如来の智慧**』)、仏性が仏と感應する／(『**能く衆生に佛の智慧・如来の智慧・自然(じねん)の智慧を興(あた)う**』) **素直な信仰の智慧**(『**信仰の智慧**』)を、常に衆生に授けたいと願っているからであります」

【三三二頁終行】(『**如来は是(こ)れ一切衆生の大施主(だいせしゅ)なり**』)「如来は一切衆生に対する最大の布施者であります。ですから皆さんは、私が為(な)してきたことをしっかりと受け止めて、だからこそ**法惜しみ**などせず、**人々に法を説き弘めていかなければなりません**。もし未来世において、善男子・善女人がいたならば、その人々のためにこの法華経を説き聞かせてあげなさい。なぜそうするのかと言いますと、その人が仏の智慧を得て、仏と同じように成ってもらうためであります」

【**法華経を信じない者には、相手の機根に合わせて徐々に導き入れよ**】——
【三三三頁四行】「もし**法華経を信じようとしない者がいたならば**、／(『**當(まさ)に如来の餘(よ)の深法(じんぼう)の中に於て示教利喜(じきょうりき)すべし**』) **たとえば法華経以外の教えの中からその人の機根にふさわしい教えを選んで、徐々に法華経に導き入れるようにしなさい**。そうした一つひとつの努力の結果、その人を正法に導き入れることができたならば、それはほかでもありません。そうした濃(こま)やかな努力をすること自体が、／(『**諸佛の恩を報(ほう)ずるなり**』) **諸仏のご恩に報いる尊い行い**であると申せます」

【**世尊からの付嘱に菩薩たちが感動**】——

【三三三頁六行】世尊はこうお説きになりますと、**諸々の菩薩たち**は大きな感動に打ち震え、大歡喜に満ち溢れました。そして体を深く曲げ、頭を垂れて、世尊に対して合掌礼拝し、そして、全員が声を合わせて次のように申し上げたのでした。

【**付嘱を受けた菩薩たちが、『広宣流布』を決意**】——

【三三三頁八行】(『**世尊の勅(ちやく)の如く當(まさ)に具(つぶ)さに奉行(ぶぎょう)すべし**』)「**世尊のお言いつけの通り、全てを実行します**。どうぞ世尊。ご心配くださいますな」

【三三三頁終四行】菩薩たちは、この大歡喜の決意を三度(みたび)繰り返したのでした。

【**十方分身仏と多宝如来に、それぞれの国へお帰りいただくことを促す**】——

【三三三頁終二行】この力強い決意をお聞き届けになった**釈尊**は、先に十方世界からそれぞれ来集された分身(ishinjin)の諸仏(十方分身仏/じっぽうishinjinbutsu)と多宝如来に対して、次のようにおおせになりました。

【三三三頁終行】(『**諸佛各(しょぶつおのおの)所安(しょあん)に隨(したが)いたまえ、多寶佛(たほうぶつ)の塔(とう)、還(かえ)って故(もと)の如くしたもうべし**』)「どうぞみなさん、**それぞれのお国にお戻りください**。大地から湧き出た多宝仏の塔も、元通りになられてください」

【十方分身仏・多宝如来・四大菩薩・地涌の菩薩・全ての諸衆が歡喜】——

【三四頁一行】世尊のこの言葉が終ると、十方世界から来て靈鷲山の宝樹（ほうじゆ）のもとの師子座（しざ）に端座（たんざ）していた無数の十方分身仏、多宝如来や上行菩薩をはじめとする無量無辺という数限りない地涌の菩薩、そして舍利弗をはじめとする聴聞の出家・在家の男女の修行者、一切世間の天人、人間、阿修羅などの鬼神たちは、世尊の有難い説法を拜聴できたことに／『皆（みな）大（おお）に歡喜（かんぎ）す』この上ない深い喜びと感動を覚えたのでした。」



ぞくるい 囑累とは

(P271・1行/P199・1行)

「面倒を頼む」、「骨が折れる仕事を依頼する」という意味。つまり「法華經の流布（るふ）を依頼する」ということです。それがこの品の題名になっています。

そうふぞく 総付属

先の『如来神力品』は、本化の菩薩に対する『結要付属・けちようぶぞく／別付属・べつぶぞく』が説かれています。そしてこの『囑累品』では、世尊があらゆる菩薩たちに対して法華經の流布（るふ）を委属する『総付属』が説かれています。

われむりょうひゃくせんまんのくあそうぎこう おい こ えがた あのくたらさんみやくさんぼだい ほう しゅしゅう
『我無量百千萬億阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。』

いまもつ なんだち ふぞく なんだちまさ いっしん こ ほう るふ ひろ ぞうやく
今以て汝等に付囑す。汝等應當に一心に此の法を流布して、廣く増益せしむべし』

(三三二頁 二行)

いまもつ なんだち ふぞく なんだちまさ じゅじ どくじゅ ひろ こ ほう の いっさいしゅじょう
『今以て汝等に付囑す。汝等當に受持・讀誦し廣く此の法を宣べて、一切衆生をして』

あまね もんち え
『普く聞知することを得せしむべし』』 (三三二頁 七行/『教師資格証』)

— 私たちが仰ぎたてまつる『久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊』像のご本尊は、立像であり、光背（こうはい）に『多宝如来』と上首唱導（じょうしゅしょうどう）の師を配しておられます。この『尊いお姿』は、まさに『囑累品』で説かれる『総付属』の場面と同じ尊容だと申せます。

《息帷のひととき ⑥》

『囑累品』では、死期を悟られた釈尊が、末法の時代に法華經を説き弘めることを託す『総付属』が説かれています。このことを現実において噛み締めますと・・・

私たちがご本尊を配する時は、この『総付属』の場に列座していることと同じであると言えます。また、『教師』の『資格証』には、この『総付属』の文言が記されています。

— この一大事をあなたは、どのように受け止めていますか？ かみ締めてみましょう。

『如来は大慈悲あって 諸の慳慳なく、亦畏るる所なくして、能く衆生に佛の

智慧・如来の智慧・自然の智慧を興う』 (三三二頁 終三行)

ほうお 法惜しみをしない

(P276・終3行/P203・終3行)

「慳慳(けんりん)なく」とは、「惜しむ心がない」という意味です。～

仏さまは、この〈得難い〉悟りを、いささかの慳慳(けんりん)もなく、あらゆる衆生に公開されたのです。それも、できるだけ回り道をしないで真っ直ぐに(疾く・とく)、阿耨多羅三藐三菩提へ達するようと、いろいろとみ心を砕(くだ)かれて、教えの手段をお考えになりました。～

自分が悟ったことを、少しも惜しむところがなく、さらけ出すばかりでなく、自分が10年かかったものなら、8年なり、5年なり、とにかく自分よりも少しでも早くそれを修得できるような手段や順序を考えてあげる……それが「慈悲心」というものです。

自分が10年かけて修得したものを、5年間でおぼえられるように苦心して教える先輩は、珍しい存在であって、「お前も、俺と同じ苦勞をしておぼえろ」というような態度が、たいていの通り相場です。これは「法惜しみ」といって、社会の進歩向上をさまたげる邪心(じゃしん)というべきものです。

《思惟のひととき ⑦》

仏さまは「法惜しみ」をされず、私たちに余すところなく、この得難い尊い教えをお分け下さっています。と庭野開祖は説きます。

— このことをあなたは、どのように受け止めますか？ また、「法惜しみ」をしない仏さまの姿勢を自分の姿勢に振り返ってみた時、果たして自分はどうか？

ふりかえてみましょう。

「仏の智慧」: 諸法実相を見通す智慧。 真実の智慧。 (P280・終3行/P206・9行)

「如来の智慧」: 仏の大慈悲心に基づく智慧。 慈悲の智慧。 P281・3行/P206・終3行)

「自然(じねん)の智慧」: 人間の本質である仏性から湧き出した智慧。この智慧は真実の教え(仏の智慧)を聞けば直ぐに理解し、また本仏の慈悲の教え(如来の智慧)を聞けばパッとそれを悟ることができる智慧です。そういう素直な智慧を意味し、それは「信仰の智慧」とも言うことができます。 (P282・1行/P207・6行)

『如来は是れ一切衆生の大施主なり～慳慳を生ずることなかれ』 (三三二頁 終行)

仏とは一切の衆生に対して、最大の布施者です。～(だから、仏を見習って)惜しむ心を持ったり、特に「法惜しみ」をしてはなりません。

『若し衆生あって信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於て示教利喜すべし』

もし、法華經を信受しない者がいたならば、法華經以外の私の説いた法の中から相手の機根にふさわしい教えを選んで説いて、徐々に法華經へと導き入れて下さい。 (三三三頁 四行)

示教利喜

(P289・終2行/P213・4行)

これは、初心の人を正法へ導くための、合理的な順序・方法を教えられたものです。

- ①教えのあらましを示し。《示》
- ②相手が心を動かしたならばもっと深く教えの意味を説き。《教》
- ③教えを実践したら功德と利益(りやく)が得られるように導き。《利》。
- ④実践の結果、功德を得て、喜びと感動、生きがいを感じられるように導く。《喜》

『俱に聲を發して言さく、世尊の勅の如く當に具さに奉行すべし』 (三三三頁 終五行)

値遇にたいする感激

(P298・4行/P219・1行)

《値遇》とは「出会うこと」、「相手の能力や考え、才能を認め、篤く評価すること。知遇」という意味があります。これは人を導き、育てる教化法としては大切なもので、指導者は、
①まず、「相手の潜在能力を見出し」、②それを「正しく評価」し、③それを「明らかに告げ」て、④そして「激励」すれば…… 相手は自分を高く認めてくれたその値遇に対して、なんともいえぬ喜びを覚えるのです。

《思惟のひととき ⑧》

人を導き育てる「値遇(ちぐう)」の順序として、①「相手の潜在能力を見出し」⇒
②「正しく評価」⇒ ③「明らかに告げ」⇒ ④「激励する」の手順を、庭野開祖は説きます。
— では、私たちが人に接し、人を育てて行こうとする手順と比べて、違いがありますか？ ふりかえってみましょう。

法華經の説法の大きな一段落がつきます。久遠実成の本仏とその大慈悲の重要部分がここで完結し、法華經の理想・(虚空)の場が幕を閉じ、説法の場が再び現実・(靈鷲山)に戻ります。

※【二処三会・(しよさんえ)ね】

《前靈山会(ぜん りょうぜんえ・さきのりょうぜんえ)》— 序品 ～ 法師品

《虚空会(こくうえ)》— 見宝塔品 ～ 囑累品

《後靈山会(ご りょうぜんえ・のちのりょうぜんえ)》— 藥王菩薩本事品 ～ 普賢菩薩勸発品

《思惟の分かち合い まとめ》

今日の『如来神力品第二十一』『囑累品第二十二』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？) ふり返ってみましょう。

合掌